

「いよいよ頂くよ」

高木は滑らかな太腿を両手で押し広げ身体を割り込ませる。

「いやです…ねえ、取って…お尻の…」

「このままでいいんだ」

「そんな、いやです…ねえ…はうッ」

ズブズブと肉棒が媚肉に潜り込んできた。

「いッ…ひひッ…ひいッ」

自分の褻が待ち兼ねた様に高木に絡み付くのが分かった。それだけではない。肛門に挿入された張り型が、粘膜を隔てて肉棒と擦れ合うのだ。

「ひいッ、高木さんッ…あッ、あッ…お尻…うんッ、ひいッ」

「恵子さん、うむッ…こんなにいいとは…」

高木が呻いた。まるで何本もの巧みな舌で肉棒を吸われている様だ。既に一度放出しているにもかかわらず、油断すると果ててしまいそうだ。

「こっちがお留守ですね」

田代は恵子の脚の間に四つん這いになっていた。白い太腿の間にある花卉に、どす黒い肉棒が出入りし、その後ろでは菊蕾に突き刺さった張り型が肛門の収縮に合わせてヒクヒクと動いている。田代は張り型に手を伸ばすとゆっくりと抽送し始めた。たちまち恵子が甲高い悲鳴をあげる。

「ひいッ…や、やめてッ…お尻、いやアッ」

いやだと思っているのに、イボが肛門を擦ると排便にも似た妖しい快感が腰全体に広がって行く。思わず肛門を食い締めると、媚肉が高木を締め上げ、いやでも形を感じ取ってしまう。

「あ…あひいッ…た、高木さんッ」

恵子がせっぱ詰まった声を漏らす。

「なんだね、恵子さん」

恵子は顔を歪めてかぶりを振った。もっとして。そう言いたくとも激しい羞恥がそれを躊躇わせる。

「フフ…いきたいんだろう」

快美と羞恥の闘ぎ合いに耐える顔を見ていると高木はもう爆発しそうだった。

「恵子さんからおねだりするんだ」

「ああ…いやです…言えません、そんな事」

「だったらお預けだ」

そう言うと高木は肉棒を引き抜いてしまった。田代も抽送の手を止める。

「そんな…高木さん…田代さん…ねえッ」

二つの穴に加えられる刺激を同時に止められてしまい、恵子は切なげに腰をくねらせる。完全に開花した秘部は花びらをめくれ上がらせ、その奥の襞までさらけ出している。ジクジクと滲み出る蜜は菊蕾を濡らし、畳にまで滴っていた。

「恵子さんから、ほしいんだろう、これが」

「あッ、あひ…ひくッ」

高木が愛液にヌラヌラ光る亀頭で恵子の女芯をチョンチョンと突くと、田代は張り型をゆっくりと回転させる。たまらぬもどかしさに恵子は自分から啞え込む様に腰を突き出し、しゃっくりのような声を漏らした。

(ああ…もう駄目…)

あれで膣を突き刺さされるのだと思うと、高木の肉棒から目が離れない。

「し…してください…」

恵子は蚊の鳴くような声で訴える。

「聞こえないよ、奥さん」

「…意地悪…」

恵子は躊躇っていたが、やがて目を閉じて言った。

「してください…恵子、高木さんのが欲しいの…」

「とうとう言ったね。、奥さん」

口にしてしまうと止まらなくなった。

「ねえ、早く、高木さん…ねえッ…恵子、高木さんので…いきたい…」

「よしよし、いれてあげるよ」

待ち焦がれた肉塊がズブズブと入ってくると、恵子の口から喜悦とも苦痛ともつかぬ声が漏れた。